



NO.96 [2020-08] 2020.10.19

朝鮮労働党創建75周年の閱兵式に関する分析

Dong Yub KIM Professor, IFES
donykim@kyungnam.ac.kr

□ 概要

- 党創建75周年の閱兵式を10月10日午前0時に開催し、生放送なく録画放送
 - 対外的な意味よりも行事の効果と意味の極大化を狙う内部的な行事に注力。
- 金正恩委員長の演説は対外メッセージを控え、対内メッセージの伝達に集中。
 - 金正恩の「愛民献身」の指導者像を強調しながら、第8次党大会を起点に新しい段階に移行する意志を強調。
- 主要兵器の公開を通じて軍事力分野の成果強調及び自衛力誇示
 - 金正恩時代に開発した新型兵器を中心に多様に閱兵式に参加。
 - 核兵器の継続的な質と量の強化と朝鮮半島の軍事的状況、相手の戦力増強を考慮した選択的通常兵器の現代化と先端化を表出。
 - 新たな戦略兵器として「北極星-4」⁴と新型のICBMを公開したのは核運搬手段を地上発射と水中発射の2つのトラックで核武力を開発・強化していることを明確にしている。

□ 主要内容の評価と分析

- 閱兵式を10月10日午前0時に開催したのが特徴
 - 北朝鮮は様々な意図と目的を持って行事時間を決めたとみられる。しかし、対米・対南関係を考慮し、刺激を最小化するためローキー(low key)で行ったという分析、米韓情報当局の情報資産の探知回避または能力を試すためという分析については、閱兵式を録画放送の形で公開したことから説得力が乏しいといえる。
 - 北朝鮮が公開した映像に10月10日午前0時を示す時計と鐘の音の画面に続き、金正恩委員長が登場する姿を見せる。一日の始まりとなる午前0時にすべての仕事を控えて閱兵式を挙行することで、党創建記念日の意味を極大化する対内イベントの意味が大きいと評価する。こうした午前0時のイベントは新年行事もあり、錦繡山宮殿参拝も当日午前0時に行っており、新しいものではない。
 - 花火、LEDショー、戦闘機の深夜エアショーなど新しい形の夜間行事を通じ、現代化した最新式の行事を披露したことから行事効果の極大化を狙った可能性もある。なお、北朝鮮の電力事情が悪くないことやマスクを着用しない夜間の大衆群衆行事を通じ、新型コロナウイルス防疫の成功を間接的に誇示している。
 - * 北朝鮮は「5・1競技場」で大集団体操と芸術公演「偉大な嚮導」を20日間行うことにしたことから大規模な党創建75周年行事を起点に新型コロナウイルスからの脱却を宣言し、日常への復帰を試みる可能性あり。
- 人民中心の金正恩委員長の演説と涙
 - 金正恩委員長の演説に直接的な対米・対南メッセージはない。全体的に対外的メッセージは控え目で対内的に人民を重視する内容で構成される。
 - 演説文で最も目を引く言葉は「コマブスムニダ(ありがとう)」である。「天のようで海のようなわが人民のあまりにも厚い信頼を受けるだけで、ただの一度も満足に応えることができず面目ない」とし、「努力と真心が足りず」とまで言及し涙ぐむ場面を演出する。これは金正恩式の統治方式の一つとされる人間的な愛民のリーダーシップ(人民大衆第一主義)といえる。
 - 一方、金正恩委員長は「私はすべての党組織と政府、政権機関、武力機関が人民のために、人民により良い明日をもたらすために尽力し、真心を尽くして仕事をするよう要求の度合いをさらに強めて戦うようにする」と発言したことから、「厳幹寛民(幹部に厳格で、人民には寛大)」の姿を見せている。今後、第8次党大会以降、5カ年計画を推進しながら党政軍の統制にさらなる厳格性を求めると予想される。
 - 前半に世界のすべての人々に慰労の意を伝えたことや、「南朝鮮の同胞たちに対しても温かい気持ちを伝え、北と南が再び手を携える日が来ることを祈願する」との発言にも意味があるという評価もできる。だが、大きな意味を見いだすにはまだしばらくの時間が必要である。文在寅大統領の国連での終戦宣言発言のからの過程として見ると、黄海での不幸な事件に対する金正恩委員長の迅速な謝罪も関連があると解釈され、南北関係のつながりを完全に断ち切ろうとしているのではなく、ある程度維持しておこうとする意図があるとみられる。
 - 新型SLBMとICBMの公開で米国への圧力を示唆したとみることもできるが、直接的な対米非難

や米朝関係に関する言及はなかった。むしろ対外的メッセージは原則的かつ包括的に軍事力が先制攻撃用ではない自衛的な防衛手段で戦争抑止力であるということを強調しながらも、いかなる勢力も北朝鮮に対して軍事力を使う場合は必ず報復することを明確にした。

— 自らが置かれている国際社会での特殊な位置と経済的に困難な状況を率直に示している。この点から北朝鮮が来年1月の第8次党大会以降、米朝関係より国際社会に対する多角化した対外政策を推進するようになる可能性も開かれている。

○ 多様な新型兵器と新しい戦略兵器公開

— 新型対戦車用装甲車、152ミリ新型自走砲、中国の輸出型VT系列と類似した新型タンクなどを前半に公開



— 公開した放射砲（多連装砲）は5種で122ミリ（改良）、240ミリ放射砲と発射管が4、5、6連装の3種の超大型放射砲（400ミリ級と推定）である。多様な大口徑の放射砲を重点的に開発するのは朝鮮半島で通常型の抑止力を極大化する狙いとみられる。3種の超大型放射砲は発射車両と発射管の数が異なるだけで、同一口径の同種の放射砲弾とみられるが、追加的な分析が必要である。

* 北朝鮮が発射実験を実施した際、大口徑操縦放射砲と超大型放射砲の2種類の名称が使われており、車両や発射管の数にも差がある。北朝鮮が公開時に一部の写真をぼかしたことから、400ミリと600ミリの2種があるとみる見解もあるが、閲兵式の映像では同一口径（400ミリ級）とみるほうが正しいようである。なお、今回の閲兵式では300ミリ放射砲は確認されていない。



— 新型対艦ミサイル（ロシアの地对艦短距離ミサイルBAL-Eと類似）と多数の対空ミサイルを公開したことも注目する必要がある。対空レーダーが含まれた新型低高度防空システムに続き、ロシアのS-300/400と類似した2種の対空ミサイルが公開された。朝鮮戦争以降、空襲に対する恐怖と米国の戦略兵器の朝鮮半島展開、韓国のF-35導入などキル・チェーンの構築に脅威を感じ、対空防衛に優先的に力を入れている証拠である。



— 北極星-2と共に公開した北極星-4は外部に「北極星-4」^ハと書かれており、放送のナレーションでも水中戦略弾道弾と紹介された。まだ発射したことのない新型SLBMで写真上では2019年10月2日に発射した北極星-3号(直径1.5~1.6メートル)と外形的に似ているが、映像の手前に座っている軍人と比較してみると、直径が多少大きく1.8~2メートル程度とみられる。直径が大きくなったため、既存の潜水艦よりは新しく開発している新型潜水艦に搭載されるとみられる。なお、北極星系列が固体燃料エンジンのため、直径が大きくなったことは固体燃料を固める技術が向上し、射程距離も伸びて最大射程は3000~4000キロ以上とみられる。閱兵式で公開した北極星-4の中、前列と後列に出たのが直径は同一だが長さに差があるとみられ、改造した既存の潜水艦と新しく開発している新型潜水艦の両方に搭載される可能性がある。



— 追加的に固体燃料の直径が大きくなったら公開したSLBM(北極星-4)だけでなく固体燃料エンジンを使う地上発射型中距離弾道ミサイルである北極星-2(射程2000~3000キロ、グアム)を発展させていると予想される。液体燃料エンジンを使用する火星系列の同射程台の弾道ミサイルである火星-12(射程5000キロ以上、アラスカ/ハワイ)を代替する地上発射型固体燃料エンジン弾道ミサイルも開発しているとみられる。究極的にはICBMも固体燃料エンジンに交代するための開発を継続すると予測することができる。

— 後半では最近披露したいわゆる北朝鮮版イスカンデルとエイタクムスと呼ぶ短距離地対地戦術誘導兵器を公開した。北朝鮮版イスカンデルの場合、発射車両が車輪型と軌道型の2種類が公開され、北朝鮮版エイタクムスは軌道車両を利用するもののみが見られた。



北朝鮮版イスカンデル



北朝鮮版エイタクス

― 閱兵式の最後は火星-12と15、そして新しいICBMが公開された。発射車両は火星-12と15は2017年発射時に公開されたもの比べて大きな変化がなく、従来のように火星-12は6軸の車両に、火星15(21.5メートル)は9軸車両(22メートル)に搭載して公開する。火星-14号が登場しなかったのは単に除外したためか、射程が15と重なりこれ以上の生産と運用をしていないということの意味するのは明確ではない。

	火星-12	火星-15
		
火星14		
火星15		

― 最後を飾った新しいICBMは発射車両(TEL)が11軸の車両であることから長さは約23~24メートル、直径(2.2~2.3メートル)も増加したとみられる。火星-16とは言わないが、外形上、メインエンジンは液体を使う既存の白頭山エンジン系列の可能性が高く、火星系列に分類される。しかし、単純に同一エンジン1個をクラスタリングし1段を3つにしたというよりは12月に北朝鮮が東倉里エンジン実験場で実施したエンジン実験に関連する新型エンジンを利用して開発しているとみられ、今後実際に発射実験を実施する可能性は排除できない。



一部では新たに公開したICBM(火星-16?)の長さや直径が大きくなったことについて射程を延長したとみているが、単純に射程よりは弾頭の重量増大や安定性、信頼性、速度増加による飛行時間の減少と迎撃回避などが中心である可能性が高い。単純にミサイルの長さや直径が大きくなれば射程が伸びるというのではなく、ミサイル自体の重さの増加で射程が減ってしまう可能性もある。火星-15号の予想される射程は1万3000メートルですでに米本土全域を攻撃することが可能であり、射程をさらに伸ばす理由はない。また、弾頭重量の増加も必ずしも多弾頭化を意味するものではない。

ミサイルの大型化のみによって多弾頭化が可能になるわけではない。多弾頭化のため移動手段のミサイルを大きくすることは機動性と隠密性を考慮すれば限界があるといわざるをえない。今回北朝鮮が公開した新しいICBMが現存するICBMの中で世界最大級ということ自体、すでに機動性と隠密性に問題を抱えている可能性がある。むしろ核弾頭の小型化と軽量化技術の向上があってこそ多弾頭化が可能になる。現在の北朝鮮の核弾頭の小型化と軽量化の技術水準を考慮した場合、多弾頭化は時期尚早であるとみられる。

MORE ARTICLES

IFES Issues and Analysis NO.96 [2020-08] Oct. 19, 2020

Institute for Far Eastern Studies

- Opinions or points of view expressed are those of the author(s) and do not necessarily reflect the official position of the Institute for Far Eastern Studies (IFES).
- *IFES Issues and Analysis* is a digital publication of the Institute of Far East Studies, Kyungnam University.

—上記の研究所の公式な立場を示すものではありません。

—メーリングリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。ifes@kyungnam.ac.kr

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below

[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,
Republic of Korea
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707
EMAIL. ifes@kyungnam.ac.kr